



活動現場から紐解くフードバンクとボランティアの姿

大坪, 日向子

(Citation)

社会学雑誌, 41:308-332

(Issue Date)

2025-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100503827>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100503827>



《二〇二三年度 社会学専修卒業論文より》

活動現場から紐解くフードバンクとボランティアの姿

大坪 日向子

神戸大学文学部人文学科 二〇二三年度卒業生

一 はじめに

一・一 研究の動機と目的

日本では近年、さまざまな社会課題が広く取り沙汰されるようになってきた。筆者は二〇二一年六月から二〇二四年三月まで、認定NPO法人フードバンク関西（兵庫県神戸市）で主に事務所作業を担うボランティアの一人として活動した。この「フードバンク」の活動は、貧困や食品ロスといった昨今注目が集まりつつある社会課題の解決に貢献し得るものである。

筆者は、食品ロス削減に携わりたいという思いからフードバンク関西の門を叩いたが、現場での経験を通じ、日本の貧困問題やひとり親世帯を取り巻く問題などにも関心を抱くようになった。

また筆者にとって、フードバンク関西は想像以上に居心

地の良い場所であった。素の自分を受け入れられ、年齢も価値観も経歴も異なる多彩な人々と「仲間」としてつながっているという嬉しさだけでなく、居場所やそこでの人との関わりを与えてくれたのである。

そうして団体やそのスタッフに関わる中で、フードバンクという存在のあり方の特徴や、スタッフらの参加の動機、経緯などについて興味を抱くに至った。

そこで本論文では、フードバンクの実態とそのボランティア、そこでの「つながり」のあり方に焦点を当てて研究を行う。先行研究の知見と現場訪問、スタッフへの聞き取りを元に、活動の在りようやボランティアの姿を克明に記録するとともに、その特徴などについても明らかにする。

一・二 本論文の構成

本論文は、以下のように構成する。

まず本章の次節以降で、使用する用語の説明と聞き取り調査を行った団体・スタッフの概要を述べる。

第二章では、先行研究が提出している社会集団や「つながり」の類型を簡潔に紹介したのち、とりわけフードバンクと関わりの深い、貧困やつながりの希薄化といった問題を軸に日本社会を概観する。また、フードバンクもその一つであるボランティア団体／ボランティア活動について、概要や近年の動向などを先行研究をもとに提示する。

次に第三章では、フードバンクの現状や課題、先行研究での知見をまとめ、本論文の意義についても確認する。

第四章では、フードバンクへの訪問・スタッフに対する聞き取り調査の結果を記し、先行研究などのデータも参照しつつ分析を行った。

第五章ではこれまでの議論を振り返り、フードバンク活動の実態やスタッフに見られる特徴などをまとめる。

一・三 用語の説明・定義

最初に、使用する用語の定義（他文献からの引用の場合を除く）と、本論文で主に取り上げる、市民を主体とした食支援活動に関する一般的な説明を行っておきたい。

本論文での議論に関わる「ボランティア」や「NPO」、

「市民活動（団体）」、「地域活動」などの用語・集団の定義には統一的な見解が存在せず、線引きや呼称は論者や文献によって異なるが、ここでは以下のように呼ぶこととする。

まず「地域活動」を、自治会・町内会等の活動など、基本的に一定の範囲の地域内にとともに居住する人々が参加し、当該地域での暮らしをより良いものにしたたり、地域の課題を解決したりするために行う活動を示す語として用いる。

「ボランティア（活動）」は、厚生省（1991）と厚生労働省の定義を参考に、自発的な意思に基づいて他人や社会に貢献する個人またはその行為を指すものと定め、自己の経済的利益を目的としたものや、自身あるいは自身の所属する団体のイメージ・知名度の向上といった目的で行われるものは除外する。そして、そのボランティアによって構成される組織は「NPO・ボランティア団体」と呼ぶ。

また「スタッフ」とは、言及する各活動の代表者（運営者とそれ以外のボランティアのいずれも含むものとする。次にフードバンクの活動について、簡潔に記述しておく。「フードバンク」とは、「食品企業の製造工程で発生する規格外品などを引き取り、福祉施設等へ無料で提供する」団体・活動のことである。以降、フードバンクを「FB」、フードバンク関西を「FBK」と適宜略して記載する。

一・四 聞き取り対象団体・聞き取り対象者の概要
 続いて、フードバンク関西と聞き取り対象者（代表者以外は仮名）について簡単に紹介する。

・団体／活動概要

認定 NPO 法人フードバンク関西^③

- ・所在地…神戸市東灘区
- ・代表…中島眞紀理事長
- ・二〇〇三年に活動開始
- ・主な活動日…月曜日・土曜日（土曜日はシフト制）
- ・役員含め全員が無償ボランティア（活動にかかる交通費等のみ支給）。現在約一〇〇名
- ・FB 団体の中では比較的規模が大きい
- ・運営費…会費、寄付金、助成金
- ・主幹事業…品質に問題はないが廃棄される食品を企業や個人から引き取り、社会的弱者を支える非営利団体や困窮する個人に直接、分配すること
- ・兵庫県下の子ども食堂が加入する「兵庫こども食堂ネットワーク」を立ち上げ、事務局として運営に関わっている

スタッフの男女比はおよそ一対一で、高校生～八〇代まで所属しているが、若年層は少なく、五〇代以上の人の割合

・聞き取り対象者の概要

表 1 フードバンク関西所属の聞き取り対象者の概要調査対象者

調査対象者	プロフィール（主な担当業務、経歴など）	インタビュー形式
位頭さん （60 代男性）	毎週の食品回収・配送を担う。活動歴約 3 年。定年退職後にすることを探し NPO・ボランティア団体を調べていた中で FBK を知る。	対面で約 1 時間
小島遊さん （50 代男性）	食品の入庫や検品、回収・配送業務、イベント運営などを担う。会社では社内向けの IT 業務に携わっていたが、コロナ禍で人との交流が大きく減ったことを機に、FBK と犬や猫の保護施設でボランティアを始めた。	対面で約 40 分
舟生さん （70 代男性）	隔週で食品回収・配送、事務所作業を担う。定年までパイロットとして働き、退職後の空いた時間の使い道を考えていたとき、たまたま FBK が目に留まって活動を始めた。	対面で約 50 分
小鯛さん （60 代男性）	週 2 回の食品回収・配送を担う。50 代で退職し、食品ロス削減など命を無駄にしないためにできることを探していたとき、FBK に出会った。	対面で約 50 分
札波さん （60 代女性）	夫の岩柴さんとともに毎週、食品の回収・配送を担う。夫が 60 代で退職した後、2 人で FBK での活動を始めた。地域の猫の世話・猫問題に関する啓発を行うボランティアもしている。古民家を改装したレンタルスペースの運営も手掛ける。	電話で約 1 時間
四家さん （60 代男性）	週 3 回、入庫や在庫管理、行政関連の事務、食品回収・配送などを担う。会社の CSR 関連の業務をしていた中で FB の存在を知り、定年退職後に FBK の一員となる。	対面で約 1 時間

合が高い。スタッフの業務内容は、車での食品回収・デリバリー（配送）と事務所内作業の二つに大分される。事務所作業としては、入庫した食品の検品、仕分け、箱詰め・発送、システムでの在庫管理、会計等の事務作業などがある。また、多くのスタッフは活動する曜日がある程度決まっている。

活動への参加頻度は、週に七日活動に関わるもののあるスタッフもいれば、HPの作成・更新の担当や在庫管理システム関連の担当など、必要に応じて年に数回のみ参加するスタッフもあり、幅が大きい。土曜日の作業への参加者は三ヶ月ごとにシフトを組んでいるが、私生活の都合で三ヶ月のうち一度も参加せずとも問題なく、長期的に活動を休むこともできる。

二 「つながり」のあり方と変遷／日本社会の課題とボランティアの概要・動向

二・一 近代における「つながり」に関する諸分類
 フードバンクというボランティア活動について論じるにあたり、この活動の特徴やそこでの人間関係のあり方を明らかにするための手がかりとして、まずは先行研究の提出している社会集団・社会関係の諸類型について見ていくことにする。本論文では近代以降の議論である、上野千鶴子

の「選択縁」を主に取り上げる。

近代以降の社会では、血縁や地縁といった『選べない（つながり）』ではない、マッキーバーのいう『アソシエーション』すなわち自分の意思で『選べる（つながり）』が次第に増加してきた（田所 2014:56）。これらを指す言葉として『社縁』という概念が誕生する（上野 1987）。

その後一九八〇年代において、女性学・ジェンダー研究の先駆者とされる社会学者の上野千鶴子は、今や血縁・地縁以外の人間関係の領域が大きく広がっており、この血縁・地縁でない関係が『社縁』という名で一括りにすることは不適切であると考えた。代表的な社縁である企業や自由意志による結婚から生まれる縁さえ、昨今では血縁・地縁と同様に一度加入すればなかなか抜けられない拘束性を有しており、その一方で『互いに相手を選び合う自由で多元的な人間関係の領域』が拡大している。このことから上野は表2のように、血縁・地縁・社縁を「選べない縁」とし、そのいずれにも還元できない新しい人間関係を「選択縁」と称した（上野 1987）。

上野は、選択縁の特徴として次の三点を挙げている。

表2 従来型ボランティア／エピソードック・ボランティアの比較

マッキーバー 上野千鶴子	コミュニティ			アソシエーション
	血縁	地縁	社縁	選択縁
	選べない縁			選べる縁

出典：上野千鶴子（1987）をもとに筆者作成

- ①自由で開放的な関係
- ②メディア媒介型の性格
- ③過社会化された役割からの離脱

第一に、加入も脱退も自由で拘束性をもたず、縁から抜けても不利益を被らないこと、第二に、「特定の情報やシンボルを媒介に」した結びつきのため、オンライン／オフラインでコミュニティの場を共有しつつも匿名性を保てることだ。そして第三に、「過社会化された役割」から離脱できることである（上野1987）。

二・二 日本における貧困・つながりの希薄化

続いて、フードバンクととりわけ関係の深い、日本の貧困問題とつながりの希薄化について、簡潔に説明したい。

近年、日本では子どもの貧困をは

じめとする貧困問題に社会的な注目が集まっている。貧困の状況を表す代表的な数値として、「相対的貧困率」が挙げられる。相対的貧困率とは、「等価可処分所得の中央値の半分の額」である「貧困線に満たない世帯員の割合」のことである（厚生労働省2023: 40）。

厚生労働省の国民生活基礎調査によれば、二〇二一年の国民全体の相対的貧困率は一五・四％で（厚生労働省2023: 14）、OECDに加盟している先進国の中でも高い割合である。また、ひとり親世帯の相対的貧困率は四四・五％と（厚生労働省2023: 14）、半数近くが困窮状態にある。現在まで新型コロナウイルス流行の社会への影響が長引き、食料品・エネルギーなどの価格の高騰も相次ぐ中、低所得者層ほど昨今の食料価格上昇から受けている負担は大きいという調査結果もあり（農林水産省2023: 54）、元々経済的にゆとりがなかった世帯が困窮に陥りやすい状況が続いていることがうかがえる。

こうした中、各地のフードバンクに食料支援を求める声の増加が繰り返し報道されており、厳しい生活状況にある人々の存在が浮き彫りになっている。

都市社会学の観点から生活困窮者支援などについて研究している稲月正によれば、貧困（生活困窮状態）の主たる形は、生活資源がないという経済的困窮であり、この経済的困窮と社会的孤立は循環的な関係にあり互いを深刻化さ

せていく(稲月 2021: 20-1)。

貧困問題はこのようにつながりの欠如と深い関係にあるが、現在の日本は困窮者に限らず人と人とのつながりが希薄化している「無縁社会」と呼ばれる状況にある。地縁・血縁・社縁という、地域や家族・親類、会社との絆が失われてきたことがその背景にある。

実際、内閣府が毎年実施している「社会意識に関する世論調査」では、地域での付き合いをどの程度しているかを尋ねているが、「よく／ある程度付き合っている」と答える人の割合は年々減少傾向にあることが読み取れ(内閣府 2023: 21-3)、人とのつながりがない・薄いという状態にある人々は、日本において着実に増えつつあると考えられる。つながりの欠乏、すなわち社会的孤立が広まる中、行政の福祉サービスの機能不全や、支援が必要にもかかわらず公的福祉サービスの対象とならない「制度の狭間」の問題も顕在化している(湯浅 2021: 194-5, 199)。

二・三 ボランティアの概要と動向

統計から見ると、ボランティア活動はまだそれほど日本人の生活に浸透しているとは言い難いように思われる。

総務省の社会生活基本調査で調べられているボランティア活動の行動者率は、二〇〇一年から最新の二〇二一年調査まで減少もしくは横ばいの状態であり、長らくボラン

ティア活動に参加した人の割合の高まりは見られないことが分かる。また、十歳以上の人が一日のうち「ボランティア活動・社会参加活動」に費やした時間の週全体平均は二〇二一年調査でわずかに二分と、「休養・くつろぎ」(一一七分)や「趣味・娯楽」(四十八分)などの十種類の三次活動の中で最も短い結果であった(統計局 2022)。

以上のように、統計で把握できる限りにおいてボランティア活動は決して盛り上がっているとは言えない状況が続いており、日本人の余暇時間の使い道として主流にはなっていないことが見て取れる。そうした中、本論文で詳しく取り上げるフードバンクは、後述するように日本では二〇〇〇年代以降に誕生し、ここ十数年で急速に広まってきたボランティア活動であることから、団体やそのスタッフには、従来のボランティアとは異質なあり方や特徴が見られる可能性が示唆される。

また、ボランティアのあり方はその時代の社会情勢に影響を受けて揺れ動き、担い手の意識や意味付けもさまざまに変化してきたものである(荒井 2019; 関 2014; 仁平 2011; 早瀬 2014)。フードバンクは日本で生まれて間もないことから、現代日本社会の人々がどのような課題やニーズを抱き、ボランティア活動に何を求め、いかなる価値を見出しているのか、その調査研究を通じてとりわけ明確に見えてくるのではないだろうか。

本論文で二〇〇〇年代以降のボランティアについて論じるにあたり加えて書き記しておきたい動きとして、「エピソード・ボランティア」あるいは「ちょいボラ（ちょこボラ）」と呼ばれるボランティアの登場・拡大が挙げられる。

エピソード・ボランティアは、近年みられるようになった「新しいタイプのボランティアの総称」であり、「マイペース」が一番の特徴とされる（須田 2010）。社会福祉・ボランティア研究を専門とする高木寛之は Husinx and Lammertyn (2004) と Macduff (2005) をもとに「長期的・定期的・安定的に活動に従事する「従来型ボランティア」の対概念として「エピソード・ボランティア」を置き、四つの観点から両者の違いを述べている（高木 2009）。この高木（2009）の議論を簡潔にまとめた表3から分かるように、エピソード・ボランティアはこれまでのボランティアとは異なり、所属組織や支援する相手ではなく、ボランティアをする「自分自身」により重きを置いているのである。

表3 従来型ボランティア／エピソード・ボランティアの比較

観点	従来型のボランティア	エピソード・ボランティア
①文化	伝統的な文化規範からなる	「私的選好による個性性」を重視した内的規範をもつ
②組織・活動分野・活動の選択	地縁や血縁、性別役割などにもとづき活動を選択 →組織への帰属意識が強い	帰属意識は低く、自らが活動から何を得られるかを重視する傾向にある
③参加の期間と量	長期的に関わり、中核メンバーとして従事	自分の都合が良い日時限りでの参加が多く、1つの組織で継続的に活動することは少ない →短期的な参加や、不定期・不規則な非連続的参加となる
④受益者との関係	組織のミッション実現を最重要とし、自己犠牲的に動く傾向にある	組織の利害やミッションへの関心は薄い 自己実現・自己成長につながる活動を選ぶため、受益者とは互酬的な関係

出典：高木（2009）をもとに筆者作成

三 フードバンクの概要と特徴

本章からは、ここまでの内容を念頭に置きながら、FBの目的を絞って論考を進めていく。

ここでは、実態調査や先行研究をもとに、FBの実態や現状、課題について概観し、本論文の意義も再度確認する。

三・一 フードバンクの概要と現状

農林水産省は、FBとは「食品企業の製造工程で発生する規格外品などを引き取り、福祉施設等へ無料で提供する」団体・活動であるとし、「食品ロス削減を図る一つの手段として」この活動を支援するという立場をとっている。⁽¹⁾

FBは一九七六年にアメリカで誕生し世界に広まった。日本では二〇〇二年、キリスト教徒のアメリカ人を中心に「セカンドハーベスト・ジャパン」が初の本格的なFBとして立ち上がり（大原2008）、以降、FB団体の数は緩やかなペースで増加を続けていた。だがここ数年はとりわけその伸びが大きく、二〇一九年度に行われた全国のFBを対象とする「フードバンク実態調査事業」の報告書（流通経済研究所2020）（以下、「二〇一九年度調査」と呼ぶ）によれば、二〇一六年以降に開始した団体が全体の半数以上を占めている（流通経済研究所2020）。二〇二三年九月時点で農林水産省のホームページには二五二のFBの情報

が掲載されている。⁽²⁾

だが、二〇一九年度調査によるとFBは八割がNPO法人もしくは任意団体、すなわち民間団体であり、活動に携わるスタッフの総数は約九割の団体が二十人以下と、大多数のFBは小規模かつ不安定な運営基盤のもとに成り立っていると読み取れる。また実際、同調査では活動上の課題として八割近い団体が人員不足を挙げている。こうしたことからFB団体においては、ボランティアの働きが重要な活動の支えとなっており、人材確保が重要な課題である場合が多いと言える。

三・二 フードバンクに関する先行研究と本論文の意義

続いて、フードバンクについての先行研究をもとに、その目的や理念、機能などに関して見ていく。先述した定義から分かるように、FBは大きく食品ロス問題と貧困問題という二つの社会課題に取り組んでいる。ただ、日本国内でのFBの調査研究はまだ緒についたばかりで蓄積が少なだけでなく、食品ロス低減の側面に注目したものが目立ち（小関2018:105）、研究の観点には偏りがある。

このように先行研究はその数こそ少ないものの、例えばFBが生み出す食品寄付体系が文脈依存的な価値を有しているという指摘（小林2019a, 2019b）や、実例をもとにF

Bが地域活性化を担いとうと示した報告(原田2018)がある。また、FBからの食料を受け取っている団体に対するアンケート・聞き取りから、FBによる支援には①利用者と福祉団体とのつながりの維持・強化、②とくに生活が逼迫している人々への即時的な支援、③利用者の精神面へのプラスの影響といった役割・効果があると明らかにした研究(佐藤2018a:76-95)などがある。

以上のように、FBはさまざまな機能や意義を実際に有し、また有することが見込まれているが、大半のFBは主にボランティアと寄付に支えられて成り立っており(佐藤2018a:70)、財源確保と並んで人材の確保と育成が重要な課題となっている。

だが、そこで活動するスタッフに焦点を当てた調査研究は、国内ではほとんど見当たらない。数少ない先行研究の一つとして、高橋・大江によるアンケート調査を用いたFB運営者の満足度の決定要因を探ったものがある(高橋・大江2021)が、対象は運営者のみ、かつサンプル数も少なく、回答の詳しい背景も掴めない。このFBという新しい活動における人間関係・相互行為の在りようや、スタッフの参加動機、スタッフに対する効果・継続要因など、FBが活動を継続していく上で必要不可欠なスタッフの内面的な部分に関しては、未だほとんど明らかになっていないのである。

加えて、「ボランティア」と一概に言っても、活動分野によって参加動機の種類が異なる傾向にあると指摘する先行研究も存在することから(例えば、桜井2007、森ほか2010)、FBに関わるボランティアには、他の既存のNPO・ボランティア団体で見られるものとは異なる要素や特徴が観察される可能性がある。

こうしたことから、二〇〇〇年以降に誕生してからとりわけここ数年で大きく広まり、社会的な注目度も高まっているFBに限定して、その詳しい実態やスタッフの参加要因や特徴、生み出される相互行為のありようなどを究明することには意義があると言える。

そこで以降の章において、FBを実際に訪問して見聞きした、活動現場の実態や運営者を含むスタッフの語りを分析する。それにより、いかなる人々によって活動が成り立っているのか、何故そこでのボランティアを選択・継続しているのか、といった、単純なアンケート調査や事例報告からは見えてこないことの解明を試み、この活動特有の要素を浮き彫りにしたい。

四 聞き取りから見るフードバンクとボランティアの実態・特徴

四・一 調査の目的と概要

本章では、フードバンク関西の運営に携わるスタッフらに聞き取りを行うことで、団体とそのスタッフのあり方や特性を捉えるとともに、F B Kでのボランティア活動の開始・継続の要因などについて明らかにすることを目的とする。

調査者は、二〇二一年六月より現在まで、F B Kでの土曜日の事務所作業スタッフとして三ヶ月に二〜四回程度活動しており、その他にF B Kボランティア交流会などのイベントや、お祭り・食品展示会などでの啓発活動にも参加してきた。

聞き取り調査は、理事長の許可を得て、平日にも事務所を訪ねて作業に参加するとともに、活動の妨げとならないよう手が空いたスタッフに協力を依頼し、主に事務所にて対面で実施した。質問項目は、主な担当業務、ボランティア活動・F B Kでの活動を開始・選択した理由、活動のやりがいや面白さ、これまでの経歴、価値観に関することなどである。聞き取り時には各調査対象者の承諾を得て録音し、二〇二三年六月から十二月にかけて、一人につき三十分〜一時間程度行った。なお、録音が不鮮明な箇所や不明

瞭な点などは調査者が一部補足した。

四・二 フードバンク関西スタッフの語りの分析と特徴

以下、実際に聞き取りの分析を行っていく。

四・二・一 気楽さ・非拘束性への志向と社会人としてのキャリアの関連

インタビュー調査の中でフードバンク関西のスタッフからよく聞かれたのが、「気楽にやりたい」「束縛されたくない」といった語りである。こうした語りからは、スタッフのボランティア活動に対する価値観やそれに対する社会人としてのキャリアの影響が読み取れた。

位頭さん（六〇代男性）は約三年間、主にデリバリー担当スタッフとしてF B Kで活動しており、現在は毎週決まった曜日に、企業からの食品の引き取りを行っている。位頭さんがボランティア活動に参加しようと探し始めたのは、長年勤めてきた会社の退職がきっかけだった。

位頭さん…僕は、三年ほど前に会社を退職したんですけど、退職する前に、退職したら何しようかなと思って。で、まあ一つは、N P Oの活動にちよつと興味があつたんで、ネット

で、自宅の周辺にどういいうNPOの団体があるのかなというのをいろいろ調べていて。だけど、あんまり「これは（やりたい）」というのは、なかったんですけども。で、そういう中で、テレビかなんかで見えたことあったのかな……フードバンクという、食品ロスとかの、いわゆるSDGsに絡んだ活動があるのをちらっと知ってて。それで、ネットで調べとつたら、フードバンク関西というのがあったんで。そのホームページ見て、これやったら、まあ場所的にもわりと近いし、ちょっと一回やってみようかなと思って。

位頭さんは社会課題への問題意識があり、それに関わる活動であったFBに目が留まったそうだ。「場所的にもわりと近いし、ちょっと一回やってみようかなと思って」といった言葉から、FBへの強いこだわりがあつて始めたというわけではなく、さまざまなボランティアを探していた中で相対的に興味を引かれた団体として、気軽な気持ちでスタートしたことが分かる。

退職後しばらくは、仕事探しも行っていたが、希望に合致するものが見つからなかったという。

位頭さん…パートとかね、派遣社員とか、ああいうのはやっぱり時間帯がね。「あ、これええな」と思うもんもあるけど、朝がものすごく早かったりとか、休みが少ないとか……やっぱり、せつかくもう退職したんやから、あんまりフルに働きたくないんで。それなのに、休みが少ないなあとかね。なんだかんだと、やっぱりマッチしないなと。

この語りには、長年のフルタイムで働く生活に区切りがついた退職後の生活では、早朝からの勤務や長時間の拘束をされるような活動は避けたいという思いが表れている。そうした中で、「とはいえ、家でぼーっとしとつてももつたないんで、体が動くうちはなにか社会貢献をしようかな」と考え、もう一つの選択肢としてボランティア活動を調べ始めたそうだ。その中でもフードバンクを選んだのは、SDGsに関連する社会課題に取り組んでおり、現代社会の状況に合った活動であると感じたからだだった。

位頭さん…やっぱり一番、今の時代にマッチしてるといふことで。SDGs、食品ロスというのが、結構やっぱりテレビでも取り上げられることが多いし。一番、

注目されてるんかなと思って。で、フードバンクを選んでんだんです。

位頭さんが退職された頃に、FBと同じく社会課題に取り組む新たな動きとして注目が集まりつつあった子ども食堂にも言及してみたところ、「気楽さ」が活動の選択基準の一つになっていることが浮かび上がってきた。

調査者

…ちなみに、退職されたときはコロナ禍が始まったぐらいで、そこから結構、子ども食堂もメディアなどで取り上げられていたと思うんですけど、子ども食堂で活動することには、ご興味を持たれなかったんですか？

位頭さん

…そっちの方はね、あんまりちよつと、向いてないなと思って。

調査者

…というのは？

位頭さん

…子ども食堂ということになると、うーん、どうなのかな……まああんまり、子どもさん相手にね、いろいろやるのは、またいろいろ難しい面もあるし。まあそれやったら、メーカーさんの方について、食品の受け取りするとか、そんなの方が気楽にできる

かなと。あんまり、せっかく退職したのに、

またなんか気い遣っていろいろやるの嫌やなと思って。できるだけ、あんまりストレスもかからないように。そういう、子ども

食堂とかいうことになる、また人との関係性もいろいろあると思うし。で、それぞれ食品を取り扱って料理し出すということになると、やっぱり、衛生上のいろんな問題もあるやろし。

調査者

…やっぱり子ども食堂っていうところでの活動に対しては、料理をしなくちゃいけないとか、子どもを相手にするというようなイメージが強いですか。

位頭さん

…うん。それ結構やっぱり、難しい仕事やなと思うし、それこそ、子どもといえども人間やから、人間を相手にしてやるとなると、対人関係で、やっぱりいろいろ……人間だから、親御さんにもまたいろんな人がいてるから……なんか、面倒なことになると嫌やな。もう、気楽にやりたいなという。

ここまでの語りから、位頭さんが求める「気楽さ」の内実として、「無理のない時間帯・多すぎない活動時間数（活

動日数」の他に、「活動内容が煩雑でないこと」や「人間関係の煩わしさが無いこと」も含まれていることが分かる。このように位頭さんは、子ども食堂などの「人との関わり」にウェイトが置かれている活動は避けたいと考える一方で、仕事での人との関わりがなくなったからこそ、人や社会とのつながりを新たに作り出したいという思いも抱いていた。だが地域に根差した団体に加わることはあまり「気楽」ではないと感じるのだという。

位頭さん…どうしても、退職するとやっぱり、世間からのいろんな情報とか、世の中とのつながりがどんどん少なくなっていくような気がするんで。だから、こういうボランティア活動なんかを通じて、社会とのつながりですね、維持しておきたい。そういう気持ちで、結構あつて。

調査者…そうなんですね。でもそれなら、例えば、自治会や公民館でやってるスポーツクラブとかの地域の活動の方に行ってみようかなとか、そういう考えにはならなかったんですか？

位頭さん…そうよね、ここに来られてる人でも、地域のそういうので活動されてる人もいます

けど。僕はあんまり、なんかそういうのも、うーん……もうちよつとなんか、気楽にいきいたいなど。

調査者…フードバンクの方が気楽な感じがするんですか？

位頭さん…うん、そう。まあ、「事務所へ」来る時間は決まってるけど、「担当業務が終わった後、家に」帰るのは、もう自分の都合で、二時に帰ろうが、三時に帰ろうがね、その辺も自由やし。

つまり、位頭さんはボランティア活動を、退職して薄れてしまった社会とのつながりを維持するための手段としても捉えていると言える。そして地域での活動よりもFBKでのボランティア活動の方が気楽だと感じている。その理由は位頭さん自身もすべて言語化することはできていないが、ここには地縁と選択縁というつながり方の違いが絡んでいるのではないかと筆者は考える。

第二章で述べたように、地縁にもとづく組織はいつた人入るとなかなか抜けられない拘束性をもっている。自治会や公民館を拠点とする組織は、FBKのような選択縁からなるNPOに比してそうした性格が強いと予想される。また、位頭さんは、子ども食堂のようにさまざまな人と関わ

り、人間関係での煩雑さが想像される活動には参加したくないと話していた。これらのことから、限定的な地域で行われる活動に対して、強い紐帯で結び付いてしまう拘束性の高いものというイメージを抱いており、そのことが活動への参加を躊躇わせているのではないだろうか。

四・二・二 「わがまま」な利他の成立

七〇代の舟生さんも、活動開始の一つのきっかけが定年退職にあり、これまでのキャリアや束縛されたくないという思いにも言及していたスタッフの一人だ。位頭さんと同じく、当時FBを選んだことには特段大きな理由はなかったそう、あるときふと思いついて事務所に立ち寄り説明を受け、あまり深く考えこむことなく活動に加わることを決めたという。FBKでのボランティア歴は四年程で、二週間に一度の企業からの食品の引き取り・受け取り団体への配達と、事務所内の営繕を主に行っている。

舟生さんはある航空会社でパイロット一筋で定年まで勤め上げたが、ボランティア活動ではパイロットとして働く中では得難かったものが得られると語る。

舟生さん…どうしてここに关わるようになったかなって考えると、最初は、もう定年退職して家で暇にしているから、ちょっと外に出ない

と、社会的なつながりを保たないとぼけちゃうとか言って（笑）、そんな考えもあった。でもね、考えたんですけど。パイロットっていうのは、一日安全に飛び終われば仕事終わりなんです。（中略）一日（無事に）飛んでよかったな、で終わり。（中略）結局残ってくものがないっちゃうのかな。後輩育てるという意味じゃ、人を育てるから人が残るんだけど。パイロット業務だけでは、うまく飛べた、安全で終わった、っていうだけで終わってくんで。だからまあ、人と関わりたい、人と関わって、しかも、有り体に言えば、ありがとうって言ってもらえることがしたいなと。（中略）お金は、そこそこ生活できるくらいあればいいから、お金じゃなくて。その先にあるものって、感謝されるってことで、それはやっぱり、すごく……すごく、自分にプラスになる。僕の場合はね。誰かのお役に立っているっていう。たまたま幸せな方に足を突っ込んで生活してるけど、そうじゃない人もいる。そしたら、ちょっと余力のあるところでお手伝いできたらなっていう気持ちは

ありました。

パイロットの仕事では、乗客との関わりもそう多くはないであろうし、一時的な関係に終始する。フライト中や目的地到着後の現地滞在中もごく少数の仕事仲間としか深く関わる機会がない。対してボランティア活動では、各団体の取り組み内容によって差はあるが、自らと同じスタッフや支援対象者との継続的な人間関係が生まれる。

FBKには、参加頻度にはばらつきがあるが一〇〇名以上のボランティア登録者がいる。さらに舟生さんが担当するデリバリー業務では、定期的に食品を寄付してくれる企業の担当者や受け取り団体の人々とも関わり続ける。困窮するひとり親世帯を対象に月に一度食品パックを届ける事業などでは、はがきを通じて利用者からの感謝の言葉も受け取ることができる。そして支援の核となる「食」は、それを受け取る人々の生、すなわち未来に繋がるものとも言えるだろう。

舟生さんにとってFBKでのボランティアは、数十年間身を置いてきた環境とは大きく異なる、多数の人々とのつながりの契機を与えてくれるものでもあった。

また、前掲の語りなどから、舟生さんの中では利己的な動機と利他的な動機が矛盾することなく並存しているように思われる。自身の社会的なつながりを維持したい・人か

ら感謝されたいという思いは利己的な動機に分類できるだろう。他方で、余力のある自分が誰かの役に立てれば、という思いを抱いていることや、困難を抱える子どもたちの成長を支援する人々の活動に関するテレビ番組を見て感化され、「子どもはしっかり食べさせなきゃだめだ」と共感した、などという話に着目すると、自身の行為に対して特段の見返りを求めない利他的な動機も併せもっているようにも受け取れる。「利他」と「利己」は一見矛盾する概念であるように思われるが、一個人の内面まで接近してみると、それらは混在し対立することなく両立し得ることが示唆される。

ただ、利他的な動機の中にも、かつて主流だった従来型ボランティアのような自己犠牲的な精神は見当たらない。先述の位頭さんも舟生さんも、ボランティア活動の前提として「自己が犠牲にならない範囲であること」を求めているのである。舟生さんはそのことを象徴するエピソードを語ってくれた。

舟生さん…一つ、もうすぐくわがままだけど。自由に暮らしたいっていうのがあります。これは大きいんですよ。だから……今は二週間にいっぺんだけ〔定期でのデリバリーを担当しているけ〕ど、前にもう一か所、〔受

け取り団体への」デリバリーに行ってくれないかって言われたんです。そこは、食料が渡せる日が、月によって違うんですよ。それを毎回打ち合わせして、この日に行きますと決める、と。そうすると、「私生活で」そんなに大したこともやってるわけじゃないんだけど、旅行行こうとか、そういうときに、そこで制限がかつちゃうんですよね。僕はもう定年したんで。言っちゃアレだけど女房と楽しく過ごしたいっていうのがある。だから、それはごめんなさいって断ったんです。（中略）これ、すごく大きいですよ。束縛されないんで、自分の満足を得るだけのためにボランティアするっていう、まあ、有り体に言やそういうことですね。

自らのボランティアとしてのあり方を「わがまま」と称し、「自由に暮らしたい」「自分の満足を得るだけのためにボランティアする」などと口にはしているように、自身の気持ち優先する・束縛されたくないという点はエピソード・ボランティアの特徴と一致する。しかしデリバリー担当の位頭さんや舟生さんは少なくとも週一回または

隔週で決まったルートを回っているため、非連続的・不規則的な参加というものではない。また、舟生さんは以前なら、趣味の旅行で一ヶ月ほど家を空けることもあったそうだが、現在は「任されてるからには、『すみません、行けない』っていうのは、言いたくないな」と思い、デリバリーの予定に穴を空けないようにしているという。すなわち、常に「利他」より「利己」が優先されているわけではなく、「利他」と「利己」は混ざり合いながら言動に表出し、その人にとって適したバランスを保ちつつボランティア活動が継続されているのである。

四・二・三 仕事にはない価値と「報酬」

舟生さんもそうであったが、スタッフへのインタビューの中では自身が経験してきた仕事に関連する話がしばしば登場し、スタッフの考え方や価値観、行動に仕事が大きく影響していることが読み取れた。

例えば、毎週のデリバリー・事務所での検品や入庫作業・イベントの企画運営などを担う小島遊さん（五〇代男性）は、外資系のメーカーでIT業務に携わっていたが早期退職し、二〇二〇年の秋頃にFBKでの活動を始めたという。ボランティアを始めたきっかけは、コロナ禍で職場での人との関わりが大きく減ったことにあった。

小島遊さん…きっかけは、会社員時代にコロナ禍になっ

て、僕のチームは、コロナでも基本毎日
オフィスに行ってただけ、もうガ
ランとして、ほぼ無人のオフィスに
行って仕事してる状態だったので、あ
まりに人と直接接する機会がなくて、な
んか退屈というか、つまらんなあと思っ
て。で、直接、人と接することのある
ものを、なんかやりたいなって思っ
て。まあ元々、会社員引退したらなにかボラ
ンティアをしようと思っただけ。で、
探してみようかなと。(中略)僕ITの
仕事をずっと三〇年してきたけど……IT
嫌いなんですよ(笑)。

調査者

…なんですか。

小島遊さん…今のデジタルの世界が嫌いなん。なんでも
オンラインオンライン。画面越しにし
て、別に見えんのが全然面白くないんで。な
ので、別にフードバンクがそういう「と
くに人との関わりが多い」活動してるか
とかじゃなくて、きっかけは本当、単純
に、NPOでボランティアすれば、人と
直(ちよく)に関われる。人と直接リア

ルに、いろんな作業で関わりを持てるよ
なと思っただけ。単純にそれだけ。スター
トは。

小島遊さんは長年ITの仕事に携わってきたものの、デ
ジタル化が進行しあらゆることをオンライン上で済ませて
しまう現代の風潮が好きではなかった。さらに数年前、コ
ロナウイルスが流行したことにより、同じ社内働く人と
すら直接関わる機会が大幅に減ってしまった。上記の語り
から、このことが「人と直に関われる」ボランティア活動
に足を踏み入れたきっかけとなったと分かる。つまり、位
頭さんや舟生さんと同様、ボランティア活動に「人とのつ
ながりづくり」の機能を求めているのである。ただ小島遊
さんの場合はとりわけ、そのつながりが「画面越し」では
なくオフラインでの関係性であることを条件として強調し
ていた。このことには、自らがその逆を行くようなITと
いう仕事に従事してきたことも少なからず影響しているの
ではないかと考えられる。

調査者

…このボランティアで面白いことや、やり
がいに感じることでありますか？

小島遊さんはFBKでのボランティアの面白さややりが
いについての話でも、仕事を引き合いに出して語っていた。

小島遊さん…やっぱ人に感謝されることかな。デリバリーでも、ここ「事務所」で「受け取り団体に」受け渡しするときだってそうだし。自分がやってることに直接反応が返ってくる、人が喜んでくれてるっていうのは、すごいやりがいやと思う。会社もそう、会社の仕事もそう……広く見りゃそうなんやけど、あんまり会社の中では直接そういうことを感じることはないかな。（中略）「FBKのスタッフは」いろんなバックグラウンドをみんなそれぞれ持つてはるじゃないですか。ここは会社に行ったら絶対知り合うことないよなって思う人らと知り合うわけで。それとも面白いですよね。

FBKでデリバリーを担うスタッフは、児童養護施設や障害者作業所などの支援団体に食品を届けに赴き、ときにはそこでいわゆる最終消費者とも接する機会がある。長らくメーカーで仕事向き合ってきたからこそ、自身の行ったことに対して感謝や喜びといった直接の明確な反応が得られるという、仕事ではなかなか得がたかった「報酬」を受け取れることにより強くやりがいを感じられるのではない

いだろうか。また、小島遊さんがもう一つの面白さとして挙げた「バックグラウンドが多様な人々と知り合える」これに関しても、会社と対比して語られている。こうしたことから、これまで人生の多くを仕事で占めていたスタッフの中での「会社・仕事」や「会社に行っていたときの自分」の存在は非常に大きく、それらと「ボランティア活動」や「ボランティアをしているときの自分」を自然と対比して捉えていることが多いのではないかと推測される。

入庫や在庫管理、行政関連の事務、デリバリーなど幅広い業務を担っている六〇代の四家さんも、会社で働くということと対比してFBKでのボランティアに出出している価値を語っていた。四家さんは会社員時代、CSR関連業務の一環で社会問題について調べる中でFBKを知って「いつか関われたらいいな」と感じ、定年が迫った頃、退職後に何をしようか考えた際にそのことを思い出して活動に加わったのだという。

四家さん…会社の仕事って、机の上で、いろいろな理想的なことを描いて、で、うまくやれたか、うまくやってるか、みたいな。それで、実際自分たちがやっていることが、なにか間接的には役に立っていると思うんですけど、本当に役に立っているのかどうかわからない。で

も、ここでの作業っていうのは、一つ一つ、無駄になることがなくて、全部人の役に立つことなので、直接「支援している相手の」声を聞かなくても、そういう作業に関われるっていうだけでもいい。

四家さんは元々エネルギー業界の大手企業で働いていたが、営業など消費者と対面するような職に就いたことはなかったそうだ。FBKの内部はかなり組織化され役割分担が行われているとはいえ、活動規模はその会社と比べるべくもない。そのため団体の成員全体との距離や、いわゆるエンドユーザーとの業務プロセスの意味での距離は圧倒的に近く、組織のミッションに直接関係しないような業務や、何のために必要なのか分からない業務も少ないはずである。そうしたことが、自らが直接食支援を行う対象者に接するわけではない作業であっても意義を感じられる要因となっているのではないだろうか。小島遊さんと企業／FBKの対比の仕方は類似しているが、この点において、とりわけデリバリー業務で食品を受け取る方が喜ぶ様子を見られることに大きなやりがいを感じていた小島遊さんとは異なる考え方が浮き彫りになっている。この差異の理由について、小島遊さんは人とのオンライン上での接触を「退屈」というか、「つまらんなあ」と感じ、他者とオフラインで

つながることに重きを置いており、それがボランティア活動を始めた主要な動機でもあったことが一因として考えられる。両者とも、会社での仕事からは感じがたかった・得がたかったものをとくに大きな価値・「報酬」として認識しているが、その「報酬」の出所や内実は個々のスタッフの価値観によって相違が見られる可能性が示唆された。

四・二・四 生じた迷いと「支援者」という立場を乗り越えて

札波さん（六〇代女性）は、夫の岩柴さん（六〇代）とともに毎週、a社（仮名）からパンやマフィン・クッキーといった焼き菓子、野菜などを引き取り、受け取り団体に配送する業務を担っている。ある地元のNPO法人によるバスでのスタディツアーでFBおよびFBKのことを知り、夫の定年退職後、六年程前に二人で活動に参加し始めた。札波さんは活動する中で、他のスタッフとの考え方の相違やFBの仕組み自体に対する葛藤を感じる瞬間があったと話してくれた。

札波さん…やってる人はそれぞれ、癖が強かったり、いろんなスタンスがあつて。一緒にやつてた方（同様の業務に関わるスタッフ）が、いい人なんだけど、受け取る人に対して「こ

なる、という試練がありましたよ。

んな食べられる美味しそうなもの貰うんだからあんまり不満は言っちゃいけないよね」とかいう感じに思う、って話なんかを「そうですかあ、そうですかねえ」って聞くし。「各受け取り団体に対して」必ず平等にならないと嫌だ」っていう思いから、「提供元から引き取った」胡瓜が一本だけだったら、ポキッと折って、はい半分こ、みたいな。そういう方もいるので、そういう考え方とかの違いに、なんか……ね、イラッとしたり、キリがないので。我慢というか、乗り越えるというか。自分の軸は、「私はもったいないのが嫌だから、もったいないことをしてたら、いつかきつと、人類バチが当たる、日本人バチが当たる」みたいな。お天道様が見ててね。「食べ物をほかす〔捨てる〕社会は良くない。命を無駄にするのは良くない」。そっちの方に自分の意識をしつかり持つようにして。他の人が、受け取る人を軽んじるような感じだったり、半分こにこだわって、そんなありがたくもないこと〔胡瓜を半分に分けて渡すようなこと〕をしようとしてるのに対して、寛容に

第三章などで述べてきたように、選択緑型の組織であるFBKには、経歴も価値観も多様な人々が集まっている。また、スーパーマーケットなどから売れ残りなどの食品を引き取り、そのまま複数の受け取り団体に引き渡しに向かう業務では、どの団体に何をどれだけ分配するかについてFBKでの統一的な基準はなく、受け取り団体の方の意向と担当スタッフの判断によって都度決められている。そもそも、その時々で引き取る食品の種類も量もかなり波があり、受け取り側の状況も日々変化するため、柔軟に対応できることが不可欠であり、ルール化自体が困難と思われる。上記のような語りからは、こうした中でスタッフによって被支援者側への向き合い方に差異が生じ、それがスタッフの悩みになる場合があると分かる。

また、売れ残った食べ物を困窮者など支援が必要な人々に届ける、という自らが行っていることが「ありがた迷惑」なのではないかと悩んだ時期もあったという。

調査者 …活動してみても想定外だったこととか、始める前と後でギャップに感じたことはございましたか？

札波さん…私らがa社からの食べ物（の回収と受け渡

し」だけずっとやってるからかもしれないけど、貰う方も、もういらないうつていう気持ちもあるんじゃないかって気づいた。ありがた迷惑なこともあるんじゃないかなと思つて、そこらへんでちよつと悩んだ時期もあったんですけど。「この活動には」そういう、添加物たくさん入ってるかもみたいなものとかさ、自分が食べないものを、いわゆる貧困の方に差し上げてるっていうような部分もあるから、実際には。それで葛藤があつて、悩む日もあつたんですけど。でもそこで、「私の軸は『もったいない』だからいいの。もったいないことしたくないから。大量消費して、大量廃棄する社会が良くない。こんなにたくさん〔自分たちだけでは〕食べきれないから、ちゃんと食べてくれる協力者、『食べてくれる方は神いー！』、ありがたいありがたい」つていう、そっちの方に考え方をシフトして、貧困でかわいそうな人に差し上げるとかいうのはあんまり強く意識しないようにしています。

a社からのパン・焼き菓子類はほとんどの場合一袋（一ケース）が大容量で、かつ外資系であるa社のオリジナル商品も多数あり、本社のある国の嗜好に寄せたかなり甘めの味付けのことも少なくない。加えて、もちろん新商品との入れ替えてラインナップは変化するものの、毎週あるいは隔週でFBKからそれらを受け取っているところも多い。こうした中で札波さんは、そのように手に入る食べ物に相対的に見て固定・限定されてしまっている状況と、自らが消費者として普段食べる物を選択する場合とを比較し、ときに「貰う方も、もういらないうつていう気持ち」になるのではないかと感じたのである。ここから、活動を通じてスタッフ自身と受け取り先にいる人々という支援・被支援の関係性が意識され、その立場の違いから生まれる格差の自覚に至っている。

そして、このような自覚と先に見たFBKスタッフ同士のスタンスの相違による悩みや葛藤を、札波さんは「命を無駄にしたくない」、「もったいないことをするのが嫌だ」という「自分の軸」に立ち返ることで克服しているのである。

札波さん…「実際に活動を」やってみたら、いわゆる貧困の人に食べ物を届けるっていう部分もあるじゃないですか。で、そこに対する気持ちとかも大きくなってきたけど、でも、

ぐるっと一周回って、やつぱり「もったいないことしたくないな」って。こういう風に食べ物が無駄にしたら、きつと神様からしつぺ返しが来るみたいな。そういう、フードロスをしたくない、もったいないこと自体をしたくないからで。かわいそうな人にあげるのかとか、見下すとか見下されとか、そういうことって考えても考えきれないけど、なんかそんなぐちゃぐちゃなことは置いて、「こんなに食べきれないものを食べてくれる人は神だなあ〜」っていう感じで。ありがと食べてくれて！という感じ。もったいないから、捨てるのは私が、嫌だから。そういう感じで、協力者の方は本当に、サンキューー！（笑）みたいな。

親の「もったいない精神」を受け継いだという札波さんの上のような語りからは、この人生を通じての価値観・モットーを抛り所とし、被支援者を「食品ロスの削減」に力を貸してくれる「協力者」であり感謝すべき存在として捉え直すことで、悩みや葛藤と支援・被支援という関係性を乗り越えていることが読み取れる。札波さんの場合、FBK

への参加動機としては「もったいない」という価値観にはあまり言及されなかったが、この幼い頃から醸成されてきた信念が、ボランティアを続ける中で抱いた心理的な活動継続の阻害要因の超克に際しては大いに寄与していることが明らかになった。以上のようにFBKのスタッフから、活動を続けるにあたっの障壁に対し独自の乗り越え方を見つけている例が観察された。

5 フードバンクにみられる新たなボランティアの形

本論文では、日本で二〇〇〇年代以降に誕生し大きく広まりつつある、フードバンクという食支援のボランティア活動を取り上げた。そして文献調査や訪問・聞き取り調査を実施し、主にフードバンク関西の事例を掘り下げ、活動やスタッフのあり方、そこでの「つながり」の様相に見られる特徴などについて明らかにしてきた。

主に第四章で取り上げたように、FBKスタッフの語りからは、特段深い理由はなくボランティア界に入りFBK団体を選択したという点での気軽さや、適度な距離感の人間関係、私生活に対する非拘束性といった意味での気楽さなど、人によって異なるさまざまな「気楽さ・気軽さ」の要素が観察された。すなわちFBは、これらの要素を含み込

んで成立し得る活動なのである。

また、多くのスタッフが、活動には楽しさややりがいなど自身にとっての価値、自身が受け取る「報酬」があることを強調していた。そして第四章で言及した札波さんが、自身の「もったいない」ことを減らしたい、という欲求の充足を活動の大きな「報酬」と捉えていたように、スタッフにとっての「報酬」とは、必ずしも自身「支援者」と「被支援者」という関係性を前提として生まれるわけではないことが明らかになった。

スタッフらの語りから見てきた通り、現代社会においては支援する側も多様なニーズを抱えている。筆者が話を聞いたスタッフの中にはボランティア活動に人とのつながりを生み出す役割を求めている人も多かったが、その点は同じであっても、どのような（どれくらいの密度の）関係性を求めているかという点は個々人で異なっていた。そしてFBにおいては、支援される側のみならず、そうした多様な支援する側のニーズも実際に満たされていたのであった。

そしてスタッフたちから何度も耳にしたのが、ボランティア活動は「自分に余裕がないとできない」という声である。貧困やつながりの希薄化をはじめとして、今や日本社会の至るところでさまざまな課題が顕在化しており、多くの人が何らかのニーズや不安を背負っている。個々のものつ「余裕」が決して多くはないからこそ、一人一人が過度

な負担を負い、自己を犠牲にすることなく気楽・気軽に参加できること、自身への制約が少ないながらも自らにとっての価値や「報酬」があることは、活動への参入・継続において重要な点であるのだろう。

フードバンクは、従来のボランティア活動よりさらに多様な価値観、多様なニーズを有する人々を巻き込み、各々のニーズを満たしながら人々をつなぐことを実現する存在となりうる、新しいボランティアの形なのではないだろうか。

註

- (1) 厚生労働省、「ボランティア活動」(二〇二三年十月二十五日取得、https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/volunteer/index.html)
- (2) 農林水産省、「フードバンク」(二〇二三年十月二十四日取得、https://www.maff.go.jp/j/shokusan/recycle/syoku_los/foodbank.html)
- (3) 理事長への聞き取りとFBKホームページ(フードバンク関西:「団体概要」(二〇二三年十二月十五日取得、<https://foodbankkansai.org/about/overview/>)より)。
- (4) ただし、ここでいう「匿名性」とは、必ずしも名前や大きな年齢、居住地域などの個人的な情報を一切開示しないことを意味しない。上野自身も選択縁の例として「共同保育」や「ママさんバレー」などを挙げていることから、あくまでも血縁・地

縁・社縁などによる関係と比して匿名性が保持できるという意味だと考えられる。

- (5) OECD「2023」『貧困率 (Poverty rate)』二〇二三年十月二十四日取得 <https://www.oecd.org/tokyo/statistics/poverty-rate-japanese-version.htm>

- (6) この調査では、十七歳以下の子どもがいる現役世帯（世帯主が十八歳以上六十五歳未満）を指す。

- (7) 井出留美 (2022)『NHK NEWS WEB』二〇二三年一月の記事 (NHK NEWS WEB「2023」『フードバンク支援要請増加も電気代の値上がりなど運営に影響』二〇二三年十二月二十八日取得 <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20230112/k10013947751000.html>) より。

- (8) NHK「2010」『無縁社会——無縁死、3万2千人の衝撃』二〇二三年十月二十四日取得 <https://www.nhk.or.jp/special/detail/20100131.html>

- (9) 「行動者数」とは「過去一年間に該当する種類の活動を行った人（十歳以上）の数」、「行動者率」とは「十歳以上人口に占める行動者数の割合（%）」のことである。

- (10) この調査では一日の行動を二十種類に分類し、それらを「一次活動（睡眠・食事など生理的に必要な活動）」「二次活動（仕事・家事など社会生活を営む上で義務的な性格の強い活動）」「三次活動（一次活動、二次活動以外で各人が自由に使える時間における活動）」の三つのカテゴリーに分けている。

- (11) 前掲注2。

- (12) 前掲注2。

文献

荒井俊「2019」『日本は「純度100%」を求めがち?——東京大学・仁平宏准教授【後編】』*academicist Journal* 二〇二三年十月二十日取得 <https://academicist-cf.com/journal/?P=10387>

稲月正「2021」『なぜ伴走型支援が求められているのか』奥田知志・原田正樹編『伴走型支援』有斐閣、19-33。

上野千鶴子「1987」『選べる縁・選べない縁』栗田靖之編『日本人の人間関係』ドメス出版、226-43。

公益財団法人流通経済研究所「2020」『平成31年度持続可能な循環資源活用総合対策事業フードバンク実態調査事業報告書』。

厚生省「1991」『厚生白書（平成3年版）』。

厚生労働省「2022」『令和4年国民生活基礎調査の概況』。

小関隆志「2018」『フランスのフードバンク——手厚い政策的支援による発展』佐藤順子編『フードバンク——世界と日本の困窮者支援と食品ロス対策』明石書店、105-26。

小林富雄「2019a」『フードバンクの位置づけと日本の現状』小林富雄・野見山敏雄編著『フードバンクの多様性とサプライチェーンの進化——食品寄付の海外動向と日本における課題』筑波書房、1-11。

——「2019b」『フードサプライチェーンにおける寄付行動——フードバンクの国際比較におけるフレームワーク』小林富雄・野見山敏雄編著『フードバンクの多様性とサプライチェーンの進化——食品寄付の海外動向と日本における課題』筑波書房、15-30。

桜井政成「2007」『ボランティアマネジメント——自発的行為の組織化戦略』ミネルヴァ書房。

佐藤順子「2018a」『日本のフードバンクと生活困窮者支援』佐藤順子編『フードバンク——世界と日本の困窮者支援と食品ロス対策』

子編『フードバンク——世界と日本の困窮者支援と食品ロス対策』

明石書店、69-98.

須田木綿子、2010、「フィランソロピーの研究動向の整理と文献紹介
(一) アメリカ 転換期にある民間主導のフィランソロピー」『大原
社会問題研究所雑誌』626: 20-7.

関嘉寛、2014、「ボランティアから捉える現代社会——「近代」との
関係から考える」内海・中村編『新ボランティア学のすすめ——
支援する／されるフィールドで何を学ぶか』昭和堂、34-78.

総務省統計局、2022、「令和3年社会生活基本調査 生活時間及び生
活行動に関する結果 結果の概要」.

高木寛之、2009、「ボランティア文化の変容に対応したボランティア
支援の在り方——社会福祉協議会ボランティアセンターの取り組
みを中心に」『福祉社会学研究』6: 61-81.

田所承己、2014、「つながら／つながらない」に対する基礎的視点」
長田攻一・田所承己編『つながら／つながらないの社会学——個
人化する時代のコミュニティのかたち』弘文堂、2-17.

内閣府、2023、「社会意識に関する世論調査の概要」.

仁平典宏、2011、「ボランティア」の誕生と終焉——〈贈与のパラドッ
クス〉の知識社会学』名古屋大学出版会.

農林水産省、2023、「令和4年度食料・農業・農村白書」.

早瀬昇、2014、「ボランティアの制度と政策——公共活動の新たな主
体として」内海・中村編『新ボランティア学のすすめ——支援す
る／されるフィールドで何を学ぶか』昭和堂、29-53.

原田佳子、2018、「わが国のフードバンク活動と地域活性」『第10回
地域活性学会論文集』10: 222-5.

森保文・森賢二・犬塚裕雅・前田恭伸・浅野敏久・杉浦正吾、2010、「参
加したいボランティア活動の種類と動機の関係」『ノンプロファイッ

ト・レジャー』10(1): 1-11.

湯浅誠、2021、「つながり続けることも食堂」中央公論新社.
吉田祐一郎、2016、「子ども食堂活動の意味と構成要素の検討に向け
た一考察——地域における子どもを主体とした居場所づくりに向
け」『四天王寺大学紀要』62: 355-68.